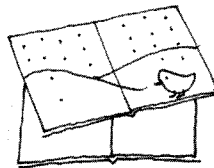


特集

緑蔭図書紹介

だいすき！ の絵本たち

河野 優子



梨木香歩に『家守綺譚』という作品があります。

冒頭で、主人公の青年はスイカを片手に「ミンミンゼミが降るように鳴く緑蔭の道を通り」亡き友人の実家に向かいます。そこは、木々が生命をもち、掛け軸から亡き友人が現れる不思議の世界です。夏の日盛りにそこだけ涼やかな緑の木蔭は、あたかも、私たちが不思議の世界に誘う特別な空間のように思われます。さあ、私も緑の木蔭の道を通って、大好きな絵本たちに会いに行きましょう。

最初に読みたい絵本は『わたしとなかよし』（ナシシー・カールソン作 なかがわちひろ訳 瑞雲舎 二〇〇七年）。「わたし」が大好きなこぶたちちゃんのお話です。こぶたちちゃんは、自分のまんまるおなかも、くるくるしっぽも、それに小さな足も、みんな大好きです。大好きな「わたし」を大切にしたいから、歯磨きもちゃんとするし、お風呂も入ります。食べ物の好き嫌いも言いません。どんな時もくじけずに「大丈夫、大丈夫」「きつとうまくいく！」と

自分を励まします。

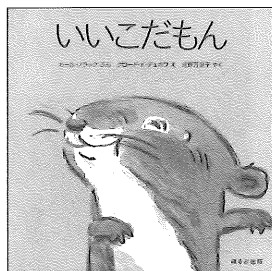


この本の原題は「I like me!」、ストレートな表現は、潔くさえ感じられます。今、自分を好きになれない子どもが増えていると言われます。胸の痛むこととです。自分を好きでいられることは、「わたしがわたしであること」の第一歩であるはずなのに。小学校・中学校・高校と進むにつれ、子どもたちを取り巻くさまざまなことは複雑になり、上手にバランスをとって生きるのは、本当に大変だなあと感じます。戸惑ったり、方向を見失ったり、時に前を向きたくなくなったり……。そんな時に、「わたしがだいすき！」と思える自分がいることはきつと力になると思うのです。子どもたちがみんな、こぶたちちゃんのようにまるごとの自

分を受け入れて、「わたし」が大好き、と思えたらいいのと思います。

次に、ロラというかわいいハムスターの出てる絵本のシリーズをご紹介します。カール・ノラックの描くハムスターのロラの愛らしさには、「わたし」への信頼感を感じます。ロラは、どんな時も『いいこだもん』（カール・ノラック文 クロド・K・デュボワ絵 河野万里子訳 ほるぷ出版 二〇〇二年）と自分にとっても肯定的です。きつと、ママがいつも「いいこね」と語りかけてくれるからでしょう。そんなロラの心には、「すてきなことば」が自然にあふれてきます。

『だいすききつていいたくて』（同一九九八年）は「すてきなことば」＝「大好き」を大切に心に





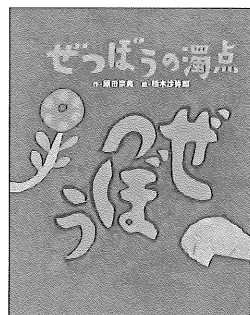
抱いて伝えようとする口
ラのお話です。「大好き」という言葉を胸に抱えていられることは、なんて幸せなことでしょうか。そして、その言葉を伝えたい相手がいること

のうれしき、伝えることができた時の喜びの、なんと大きなことでしょうか。ロラの素直な表現は、言葉に生命を吹き込むのは「伝えたい」という気持ちであることを教えてくれます。そして表現の仕方、伝え方に、その人らしさがあらわれるのでしよう。ロラのように、伝えたい言葉が心にあつて、大切に伝えたい相手がいて、伝えることができたなら、本当に素敵だと思います。そしてまた「大好き」と伝えられたパパとママの、なんとも幸せそうな様子。「大好き」という気持ちを受け取ってもらえること、うれし

いよと言ってもらえることは、子どもにとつて幸せなコミュニケーションーション体験に違いありません。最後のページで「あし

たのすてきなことば」は、キラキラと光ってロラを包み込んでいます。ロラの心に寄り添った「だいきすきっていいかくて」という邦題にも心惹かれますが、明日への予感を秘めたこの結びに、ほっこりとした気持ちで本を閉じることが出来ます。

「言葉」といえば、ひらがなの国に寄り道をして、ちよつとユニークな絵本『ぜつぼうの濁点』（原田宗典作 柚木沙弥郎絵 教育画劇 二〇〇六年）を読んでみましょう。これは「ゆめうつ草紙」（原田宗典著 幻冬舎 一九九九年）が初出ですが、加筆修正して、絵本化した作品です。『ぜつぼうの濁





点」とは「ぜ」の文字についている濁点のこと。一途に主の「ぜつぼう」を思いやる、けなげな濁点です。絶望も、きちんと向き合って心を尽くせば、いつか希望の光が射してくる——原作の面白さが、絵本ではより魅力的に表現されていて、なんだか「絵本のチカラ」のようなものを感じます。途中でクスリ、おしまいにニッコリしたくなる絵本です。

最後の「大好き」の絵本は、『ルリユールおじさん』（いせひでこ作 理論社 二〇〇六年）です。ソフィーは木が大好きな女の子。ある日大切にしていた植物図鑑がバラバラに。どうしてもその本を直したいと願って、一人のルリユール (Lully 製本職人) と出会います。彼は、やはりルリユールであった父親のように、「私も魔法の手を持たただろうか」と自分に問いながら、ソフィー

の本に再び命を吹き込みます。表紙はソフィーの一番好きな、そして、彼にとっては父の思い出につながるアカシアの木の絵。タイトルはARBRES de SOPHIE (ソフィーの木たち)。じっと見入るソフィーの後ろ姿からは、彼女の心の震えが伝わってくるようです。木への、その本への、思いの深さを感じます。大人になったソフィーは植物学者への道を歩みます。きっと、彼女は人生の岐路に立った時、何度も何度もこの本のページを繰ったことでしょう。「木が大好き」という気持ちと、向かい合ったことでしょう。そんなソフィーの姿に、「大好き」という気持ちは自分がどう生きていくのかを考える原点になるのかもしれないと感じます。子どもたちが、ソフィーのように「大好き」になれる何かを見つげられることを願って、絵本の世界から帰ってくることにしましょう。

(立教女学院短期大学非常勤講師)